

A 私立看護系大学生の社会的スキルの構造

牛ノ濱幸代¹⁾, 大園 孝子¹⁾, 平田 直美²⁾

要 旨

大学生の対人関係能力の低下が指摘されている。そこで、経験の少ない看護系大学生の初年次の社会的スキルの実態を検討した。対象 A 私立女子大学看護学科 1 年生 50 名に菊池章夫の KiSS - 18 を使用し社会的スキルを測定した。

次のような結果が明らかとなった。

1. 社会的スキルの総得点は、看護系学生の中では、高い得点ではなかった。
2. 領域別で得点の高いスキルは【高度のスキル】であり、得点の低い項目は【初歩のスキル】であった。
3. 18 項目の中で最も高かった得点は「謝る」であり、他の 2 大学と一致した。
4. 因子構造は【基本的な対人関係スキル】、【否定的な感情・意見の処理スキル】、【しなやかさに伴うスキル】、【表面の人間関係スキル】とした。

対人関係能力の向上を目指したカリキュラムの効果の測定時の基礎資料、あるいは効果的なカリキュラム構築の資料とすることが期待できる。

対象者の社会的スキルのその後の変化を今後みていき、教育評価とともに内容の検討をしていきたい。

キーワード：看護学生，社会的スキル，KiSS-18

I. はじめに

大学生の対人関係能力低下が指摘されている。

援助職に対人関係能力は必要不可欠な能力である。看護師は援助職である。看護系大学生に、対人関係能力の低下の傾向が存在するとすれば、対人関係能力の向上を、専門領域の教育と並行して、意図的にはかる必要があるだろう。

さて、現実に看護系大学生の対人関係能力は低下しているのだろうか。

対人関係能力の改善に社会的スキル訓練が有効とされる¹⁾。もし、実際に看護系大学生に対し社会的スキル訓練が必要であるならば、訓練が必要なのは、社会的スキルのうちどのようなスキルの領域であるのか。

社会的スキルの定義はいまだに統一的なものではなく、包括的な概念である²⁾。具体的な行動を指す概念や、そこに認知過程を加えた概念を含有した定義も存在する³⁾。例えば、社会心理学者の菊池によると、社会的スキルは「対人関係を円滑に運ぶために役立つスキル」である⁴⁾。

そもそも、社会的スキルの低下は、社会的不適応を示す一部の層に確認されていた。相川によると、社会的スキルが低下している個人は、社会的不適応や、心理的・精神医学的問題を抱えたるリスクが高い、とされる⁵⁾。それらの対象が、望ましい対人関係を構築するために、社会的スキル訓練が開発され、その訓練の効果が実証さ

れている。

一方で、ハイリスクの層のみでなく社会全体の傾向としてコミュニケーション不全や人間関係の希薄化が指定されてきた。一般大衆を対象に、人間関係の不安解消のために、社会的スキルが訓練されその実践も報告されてきた⁶⁾。

加えて、野口は大学生の対人関係技能の低下と他者とのコミュニケーションのとり方に悩みの多さを報告している⁷⁾。そして、中村は、対人関係能力の低下した大学生を対象に大学において対人関係能力を高めることを目指した授業が必要と指摘している⁸⁾。

金山は、人間関係の営みの中で展開される教師を養成する教職課程の大学生を対象に社会的スキル訓練を実施し、その効果を実証した。大学の教職課程において社会的スキル訓練を行う意義を強調している⁹⁾。

ところで、看護は人間関係の営みに基づき実践される。

看護における対人関係の重要性を明確に強調した看護理論家にペプロウとトラベルビーが挙げられる。

対人関係プロセスを構造的な概念で記述することで、看護モデルを開発したペプロウは、看護を「有意義な、治療的な、対人関係のプロセスである。」と定義している¹⁰⁾。トラベルビーは、「対人関係 (Interpersonal aspect) は、看護という状況では、看護の目的を成し遂げるための手段である。」と明確に記述している¹¹⁾。

つまり、良好な対人関係を築かなければ、看護師は看護の対象者に質の高い看護を提供できない、と解釈できる。

1) 鹿児島純心女子大学看護栄養学部看護学科

2) 鹿児島大学大学院保健学研究科博士後期課程

表 1 KiSS - 18 の各項目得点

		度数	得点平均値	標準偏差	最小値	最大値
I 初歩的スキル	知らない人とでも、すぐに会話が始められますか。	50	3.14	1.340	1	5
	初対面の人に、自己紹介がうまくできますか。	50	2.90	1.199	1	5
	他人と話をし、あまり会話がとぎれない方ですか。	50	2.84	1.149	1	5
	計		8.88			
II 高度のスキル	他人にやってもらいたいことを、うまく指示することができますか。	50	2.98	1.020	1	5
	他人が話しているところに、気軽に参加できますか。	50	2.94	1.331	1	5
	何か失敗した時に、すぐに謝ることができますか。	50	3.98	0.937	2	5
	計		9.90			
III 感情処理の スキル	相手が怒っている時に、うまくなだめることができますか。	50	3.20	0.948	1	5
	こわさや恐ろしさを感じた時にそれをうまく処理できますか。	50	2.86	0.948	1	5
	自分の気持ちや感情を素直に表現できますか。	50	3.32	1.253	1	5
	計		9.38			
IV 攻撃に代わる スキル	他人を助けることを、上手にやれますか。	50	3.48	0.762	2	5
	まわりの人たちとの間でトラブルが起きても、それを上手に処理できますか。	50	2.96	0.832	2	5
	気まずいことがあった相手と、上手に和解できますか。	50	2.98	0.937	1	5
	計		9.42			
V ストレスを処理 するスキル	相手から非難された時にも、それをうまく片付けることができますか。	50	2.86	0.990	1	5
	あちこちから矛盾した話が伝わってきても、うまく処理できますか。	50	3.08	0.966	1	5
	まわりの人たちが自分とは違った考えをもっている、うまくやっていますか。	50	3.64	0.898	2	5
	計		9.58			
VI 計画のスキル	仕事(学習)をする時に、何をどうやったらよいか決められますか。	50	2.98	1.000	1	5
	仕事(学習)の上で、どこに問題があるかすぐに見つけることができますか。	50	2.90	0.995	1	5
	仕事(学習)の目標を立てるのに、あまり困難を感じない方ですか。	50	3.02	1.000	1	5
	計		8.90			

実際に看護職を対象に社会的スキルを測定する研究は多数見られる。三浦は看護職における KiSS-18 の活用について、対人関係を円滑にするという点では、2つの時期に問題が集中していると述べている。一つは、人間関係が希薄と言われる学生時代、もう一つは学校を卒業してすぐのリアリティーショックを体験する新人時代である。看護職における社会的スキル尺度の開発や、看護領域で社会的スキルの考え方や尺度の活用は行われている^{12) 13)}。

だが、対人関係能力の低下が懸念される最近の、看護の初年次の学生に対する基本的な社会的スキルの測定は数例にとどまっている。

初年次の学生のもつ社会的スキルの実態を把握すれば、対人関係能力の向上を目指したカリキュラムの効果を測定時の基礎資料、あるいは効果的なカリキュラム構築の資料とすることが期待できる。

高い対人関係能力が必要とされている看護の学生の社会的スキルはどうなっているのか。看護学生の社会スキルの特性は何か。

以上から、経験の少ない看護系大学生の初年時の社会的スキルの実態を探索することを、研究の目的とする。

II. 研究方法

1. 対象

A 私立女子大学看護学科 1 年生 50 名。
有効回答 50 名 (100%)

2. 研究期間

平成 21 年 9 月 (夏季休暇終了直後)

3. 調査項目

社会的スキルの測定は菊池章夫の KiSS-18 を使用した¹⁴⁾。このスキル尺度は、【初歩的なスキル】【高度のスキル】【感情処理のスキル】【攻撃に代わるスキル】【ストレスを処理するスキル】【計画のスキル】の 6 つの領域に分類されている。1 領域は各 3 項目あり、尺度は 18 項目より構成されている。

各項目について 1. 「いつもできない」、3. 「できるわけでもできないわけでもない」 5. 「いつもできるの」の 5 件法にて自己記述式質問紙にて測定。1～5 で配点。1～18 の項目を、最低は 18 点、最高は 90 点で分布可能。

4. 倫理的配慮

- 1) 研究者が対象者に自由意志による研究参加、プライバシーの保護、研究参加が成績には関連しないこと等について、文書と口頭で説明し、参加について十分に検討できる時間を設けた。
- 2) 参加者にいつでも参加をとりやめる自由を保障した。
- 3) 参加の同意が得られた場合は、対象者から同意書に署名をいただいた。
- 4) データは匿名で収集し個人が特定されないように、取り扱った。

5. 統計学的な解析方法

統計パッケージ SPSSver.14.0 を使用した。

社会的スキルに関して、社会的スキルの 18 項目について、相関行列を求め、因子分析を行った。主成分分析では、固有値の推移を参考に、4 因子を抽出し、バリマックス回転を実施した。

表2 社会的スキルの構造

項目の主旨	因子負荷量				共通性
	因子1	因子2	因子3	因子4	
1.基本的な対人関係スキル					
他人との会話に参加できる	0.866				
自己紹介ができる	0.839				
知らない人と会話を始められる	0.806				
会話が途切れない方である	0.805				
他人にうまく指示ができる	0.801				
気まずい相手と和解できる	0.714				
他人を助けることができる	0.604				
自分の気持ち・感情を表現できる	0.531				
非難を処理できる	0.502				
2.否定的な感情・意見の処理					
こわさや恐ろしさを処理できる		0.877			
非難を処理できる		0.628			
問題がどこにあるか見つけることができる		0.61			
他人とのトラブルを処理できる		0.574			
矛盾したメッセージを処理できる		0.562			
他人の怒りを処理できる		0.505			
何をするか決められる		0.436			
3.しなやかさに伴うスキル					
集団圧力に対応できる			0.722		
失敗した時に謝ることができる			0.65		
自分の気持ち・感情を表現できる			0.58		
問題がどこにあるか見つけることができる			0.508		
4.表面的な人間関係スキル					
目標設定に困難を感じない				0.752	
他人の怒りを処理する 逆転項目（できない）				-0.638	
				0.591	
固有値	6.737	2.746	2.456	1.795	
寄与率(%)	34.604	14.105	12.613	9.27	
累積寄与率(%)	34.604	48.709	61.322	70.542	

Ⅲ. 結 果

1. 社会的スキルの記述統計

社会的スキルに関する18項目は信頼係数 $\alpha = .912$ であり、高い信頼性を示した。

社会的スキルの総得点は平均値が56.06点、標準偏差（以降±のみで表記） ± 11.833 点、最小得点30点、最大得点76点となった。

KISS-18項目の得点を6領域別で比較すると（表1）、得点の高いのは【高度のスキル】9.9点、【ストレスを処理するスキル】9.58点、【攻撃に代わるスキル】9.42点となり、最も低い【初歩的なスキル】8.88点となった。

各項目の中で得点が高かった項目は以下である。

「何か失敗したときにすぐ謝ることができますか」【高度のスキル】 3.98 ± 0.937 点、「まわりの人達が自分とは違う考えを持っていても、うまくやっていけますか」【ストレスを処理するスキル】 3.64 ± 0.898 点、「他人を助けることを上手にやれますか」【攻撃に代わるスキル】 3.48 ± 0.762 点であった。

一方、得点が低い項目は、「他人と話をして、あまり会話がとぎれないほうですか」【初歩的なスキル】 2.84 ± 1.149 点、「怖さや恐ろしさを感じた時にそれをうまく処理できますか」【感情処理スキル】 2.86 ± 0.948 点、「相手から非難された時にもそれをうまく片付けることができますか」【ストレスを処理するスキル】 2.86 ± 0.99

点であった。

2. 社会的スキルの構造

社会的スキルを因子分析した結果、以下の4つの因子で構成されていた。（表2）

第1～4因子の寄与率は34.604%、14.105%、12.613%、9.270%となった。累積寄与率は70.542%であった。

各因子を構成する因子負荷量0.4以上を示した項目、そして因子名は以下のとおりであった。

因子1は、「他人との会話に参加できる」「自己紹介ができる」「知らない人と会話をはじまられる」「会話が途切れないほうである」「他人にうまく指示が出来る」「気まずい相手と和解できる」「他人を助けることができる」「自分の気持ち・感情を表現できる」「非難を処理できる」という9項目であった。因子負荷量は0.866, 0.839, 0.806, 0.805, 0.801, 0.714, 0.604, 0.531, 0.502である。因子1は、6領域における【初歩的なスキル】【高度なスキル】領域に所属する項目が大多数だったため、因子名は「基本的な対人関係スキル」とした。

因子2は、「怖さや恐ろしさを処理できる」「非難を処理できる」「問題がどこにあるかみつけることができる」「他人とのトラブルを処理できる」「矛盾したメッセージを処理できる」「他人の怒りを処理できる」「何をするか決められる」の7項目であった。因子負荷量は0.877,

表3 大学生・看護学生の総得点及び領域別一覧

		看護						一般
発表者		A大学	工藤他16)	野崎他17)	口藏他18)	藤野他19)	鎌田20)	堀毛他15)
対象		1年生	1年生	1年生	3年生	4年生	4年生	大学生女子
対象数		50	54	75	30	58	55	565
総得点		56.06±11.83	62.20±9.22	58.09±7.26	56.6±7.1	60.2±8.76	55.15±8.56	54.35±9.36
領域別	初歩的	8.8	9.96	9.6				
	高度	9.9	10.65	9.8強				
	感情処理	9.38	10.08	9.6強				
	攻撃に代わる	9.42	9.99	9.4強				
	ストレス処理	9.58	10.8	9.4弱				
	計画	8.9	10.71	10.2				
発表年		2009	2006	1998	2007	2005	2005	2006

注 工藤らのデータは領域別の1項目平均値を領域別の得点に変更。野崎らのデータはグラフの目盛りを読み取った。

0.628, 0.61, 0.574, 0.562, 0.505, 0.436 であった。因子2は、6領域の【感情処理のスキル】の怖さ・恐ろしさという原初感情を扱う項目の因子負荷量が最も高かった。次に【ストレスを処理するスキル】に属する非難に対する処理を扱った項目が高かった。そこで、《否定的な感情・意見の処理》とした。

因子3は、「集団圧力に対応できる」「失敗したときに謝ることができる」「自分の気持ち・感情を処理できる」「問題がどこにあるかみつかることができる」。因子負荷量は0.722, 0.65, 0.58, 0.508であった。因子3は、《しなやかさに伴うスキル》とした。【ストレスを処理するスキル】である周りの人との折り合いをつける、【高度のスキル】の謝る、【感情処理のスキル】気持ちを素直に表現するなどの規則じばられない、しなやかさから構成されたからであった。

因子4は、「目標設定に困難を感じない」「他人の怒りを処理する」「何をするか決められる」。因子負荷量は0.752, -0.638, 0.591であった。因子名は、《表面的人間関係スキル》とした。外側から観察すると淡々としてみえるスキルで占めていた。内容はメタ認知のゆえか、逆にパニックのゆえかは問わず、結果的に他者との深いかかわりの存在しないスキルと解釈した。

IV. 考 察

本研究の目的は、経験の少ない看護系大学の初学生の社会的スキルの実態を探索することである。

社会的スキルの18項目の総得点の平均値は56.06 ± 11.833点であった。

6領域別の総得点を表1に示した。得点の高いのは【高度のスキル】で、最も低いのは【初歩的なスキル】となった。

18項目で、得点が高かった項目は「失敗したときに謝ることができる」、「まわりの人たちが自分と違った考えを持っていてもうまくやれる」、「他人を助けることができる」、得点が低い項目は、「会話がとぎれないほうである」、「怖さ・恐ろしさを処理できる」、「非難を処理できる」であった。

社会的スキルを因子分析した結果、以下の4つの因

子で構成され、累積寄与率は70.542%であった。

因子1は、《基本的な対人関係スキル》、因子2は、《否定的な感情・意見の処理のスキル》、因子3は、《しなやかさに伴うスキル》、因子4は、《表面的人間関係スキル》とした。

1) KiSS-18の記述統計について

(1) 総得点と領域別得点

KiSS-18を使用した総得点の平均値の先行研究を、表3に示した。単純に比較はできないが、堀毛らの2006年の研究からする¹⁵⁾と、一般の女子大学生の54.35点よりは、その他の看護系の学生は55.15～62.20点と、概ね高い傾向にあった。

本研究の対象は1年生を対象とした。表3に示したように、看護学部1年生を対象にした野崎らは、58.09 ± 7.26点 (N = 75)であり、工藤らの研究では62.20 ± 9.22点 (N = 59)、であった。本研究の結果は、56.06 ± 11.833点 (N = 50)であり、同じ1年生を対象とした野崎ら、工藤らの結果と比較すると得点は低い。

領域別にみると、A大学においては、高得点は【高度のスキル】9.9点、【ストレスを処理するスキル】9.58点であった。

最も低いのは【初歩的スキル】8.88点、次に低いのは【計画のスキル】8.9点であった。【高度のスキル】はあるものの、【初歩的なスキル】が不足している。A大学において、今回の結果で2番目に低い【計画のスキル】は、野崎らや工藤らの報告では、得点が10.2点、10.71点となっており、【計画のスキル】に関する得点は低いといえる。単純には、学年で比較できないが、元々の対象の特性があるのかもしれない。

看護系大学の中では、A大学は総得点が低い傾向であった。領域別では【初歩的スキル】8.88点【計画のスキル】8.9点が低かった。【初歩的スキル】の項目は、自己紹介、知らない人とでもすぐに話することができる、会話がとぎれないなど、看護職に欠かせない対人関係能力である。また【計画のスキル】は何をどうやったら決められるか、どこに問題があるかみつかることができる、学習の目標を立てる等、問題解決に欠かせないスキルである。

表4 因子構造比較

	A大学	菊池24)	松島他25)	佐藤他26)	千葉他27)
対象	看護大学1年	男子学生	男女大学生 専門学校生	男女大学生	看護者 看護短大生
対象数	50	100	443	612	468
年度	2009年	1993年	1999年	2004年	2000年
因子構造 (スキル)	①基本的な対人関係 ②否定的な感情・意見の処理 ③しなやかさに伴う ④表面的な人間関係	①問題解決 ②トラブルの処理 ③コミュニケーション	①対人積極性 ②他者理解 ③対処行動 ④自立	①葛藤処理 ②会話 ③援助/融和 ④自立	①言語的相互作用 ②感情処理 ③計画 ④対人配慮 ⑤協調性

大学一般において、大学の大衆化に伴って単なる知識の修得にとどまらず、社会人として必要となる人間関係における礼儀作法、感情の自己統制等知識以外の人間としての資質の育成も求められるようになり、初年次教育の必要性が近年謳われてきた²¹⁾。看護系大学においては、看護教育の大学化に平行して現場での実践看護能力の低下が懸念され、文部科学省・厚生労働省の働きかけにより、各大学こぞってカリキュラム改変の努力を勧めてきている。A大学においても、大学生の対人関係能力の低下、生活体験不足から想像力の不足等、カリキュラムの改善に独自性をもって進めてきた。例えば、日本伝統文化の演習を取り入れた授業を課内科目に取り入れ、自己形成の展望力や人間関係における対話力の構築、道具活用力の読解力の育成を目指している。文化継承や礼法に関する社会的スキルのその後の変化を今後みていき、教育評価とともに内容の検討をしていく。その際、この初歩のスキルを修得することによって、持っている高度のスキルがさらに発揮できると期待が可能であろう。

(2)18項目中の最も得点の高かった項目と低かった項目

岸田らは全学共通科目受講生26名対象に、調査を行っている²²⁾。18項目の中の最高得点は「失敗したとき謝ることができる」 3.59 ± 1.1 点。最低得点項目は「気まずい相手との和解」 2.68 ± 0.84 であった。工藤らの報告では最高得点項目は「失敗した時に謝ることができる」 4.28 ± 0.79 点、最低得点項目は「他人が話をしているところに気軽に参加できる」 3.11 ± 0.9 点であった。A大学においては最高得点項目「失敗したときに謝ることができる」、最低得点項目は「会話がとぎれないほうである」であった。

菊池はKiSS-18の研究ノートの中で、KiSS-18尺度使用に際し、基本的には総得点のみを問題にし、領域別の得点はとりあげないと述べている²³⁾が、岸田らと工藤らの報告においても、最高得点が【高度のスキル】の領域である「失敗したときに謝ることができる」であるのは興味深い。

「謝る」は、KiSS-18では高度のスキルに分類されている。筆者らは、「謝る」というのは、正直さ・誠実さ・勇気を伴い、高度のレベルであると考え。しかしながら、日常的によく使用される「すみません」という言葉は、習慣化された、形骸化された単なる一コミュニケーションである可能性が懸念される。しかし、「謝る」ことができるということは、医療者の倫理にもつながること、そこを発展させていくことは、重要と考える。

2番目に得点の高かった項目は「まわりの人たちが自分と違った考えを持っていてもうまくやれる」【ストレスを処理するスキル】であった。すぐに謝るという行動ができるということ、周りの人が自分と考えが違ってうまくやれるというところに、柔軟性・しなやかさをみることができる。しかし、視点を変えると信念がないとも解釈できるが、意外と打たれ強い部分もあるのかもしれない。あるいは打たれ弱い部分がかったとして、実習等の場面で、できなさを自覚する場面等、自尊感情が低下することもあるだろうが、学生は、指導者の関わりや対象に喜ばれる体験などで、自己効力感を持つ体験をする。その結果、感情処理スキルやストレス処理のスキルを学んでいくと期待する。

得点が低い社会的スキルの項目は、「会話がとぎれないほうである」【初歩のスキル】、初歩「怖さ・恐ろしさを処理できる」【感情処理のスキル】、「非難を処理できる」【ストレスを処理するスキル】であった。可能性として、問題や課題に対する直面化に弱い傾向を窺わせる。

2) 因子構造について

KiSS-18の因子分析の構造の先行研究を一覧にした(表4)。A大学学生の因子1は、『基本的な対人関係スキル』、因子2は、『否定的な感情・意見の処理』、因子3は、『しなやかさに伴うスキル』、因子4は、『表面的人間関係スキル』とした。これらは菊池が述べているように、重なりと見受けられる因子もあった。

看護系においては、千葉・相川(2000)は、260名の5年以上の臨床経験をもつ看護者と208名の看護短大生を対象に因子分析を行っている。²⁷⁾が、単独の因子分析の結果を示しておらず、かつ他の同様の対象にし

た因子分析は見当たらなかった。

本研究において、方法論に関する問題として、母集団「看護系大学生」に対して標本が一つの集団のみを取り扱っており、標本に偏りがある。

社会的スキルである対人行動を扱う菊池の KiSS-18 を使用した。この尺度は既に信頼性妥当性が検証されている。しかし、我々が把握したい社会スキルを把握できたのか。集団によって、得点の高低が存在する可能性があった。その特性の相違を把握する必要がある。

看護師に必要な社会的スキルを測定する尺度の開発も実践されているが、看護の学習が進まない初年次における大学生に対し、基本的な社会的スキルの把握を学生の負担の少ない簡易な尺度で測定した。若者の社会的スキルが低いといわれて久しい、かつ対人関係が必要不可欠になる援助職である看護系大学生を対象に測定したことは、有用であったといえる。

しかし、既存の尺度の KiSS-18 の使用に留めており、独創性が不足することに本研究の限界がある。

得点の高低の影響要因が不明である。影響する要因を特定していく必要がある。

V. おわりに

A 私立女子大学看護学科 1 年生 50 名を対象に、菊池章夫の KiSS-18 を使用し社会的スキルを測定した。経験の少なく社会的スキルが低いことが予測された看護系大学生の初年次の社会的スキルの実態を検討した。次のような結果が明らかとなった。

1. 社会的スキルの総得点は、看護系・他大学一般の女子大学生と比較すると、概ね差は見られない。看護系学生の中では、A 私立女子大学看護学科 1 年生は決して高い値ではない。
2. 領域別で得点の高いスキルは【高度のスキル】であり、得点の低い項目は【初歩のスキル】であった。【初歩のスキル】を修得していくことによって、もっている【高度のスキル】がさらに発揮できると、期待が可能である。
3. 18 項目の中の最も得点が高かったのは「謝る」に関する項目であり、他の 2 大学と一致した。
4. 《基本的な対人関係スキル》、《否定的な感情・意見の処理スキル》、《しなやかさに伴うスキル》、《表面的人間関係スキル》の 4 つの因子で構成されていた。

対人関係が必要不可欠な援助職である看護系大学生を対象に、社会的スキルを測定し、実態を把握したことは、今後の社会的スキルを向上させる際の資料となり有用であった。

対象者の社会的スキルのその後の変化を今後みていき、教育評価とともに内容の検討をしていきたい。

本研究にあたり、研究に協力して下さった A 大学看護学科の学生に深謝する。

文 献

- 1) 和泉鉄平, 大坊郁也: 社会的スキルと自己主張に関する研究の課題と展望 1. 北星学園大学大学院論集 1: 21-37, 1998
- 2) 堀毛一成: 社会的スキルの習得, 齊藤耕二, 菊池章夫編: 社会化の心理学ハンドブック, 川島書店, 79-100, 1990
- 3) 稲本純子, 熊谷恵子: ソーシャルスキルトレーニングの介入方法についての文献研究, 筑波大学学校教育論集, 30: 56, 2008
- 4) 菊池章夫: KiSS-18 研究ノート. 岩手県立社会福祉学部紀要 6 (2): 41-51, 2004
- 5) 相川充: 人づき合いの技術～社会的スキルの心理学～, サイエンス社, 2000
- 6) 大坊郁夫編: 社会的スキル向上を目指す対人コミュニケーション. ナカニシヤ出版, 第 7 章 157-163, 2005
- 7) 野口康彦: 学生相談におけるソーシャルスキルズトレーニングの活用. 25: 213-223, 2005
- 8) 中村和彦: 体験学習を用いた人間関係論の授業が学習者の対人関係能力に及ぼす効果について. 南山大学アカデミア, 76: 103-141, 2003
- 9) 金山元春他: 教職課程に在籍する大学生に対する社会的スキル訓練. 教育実践総合センター研究紀要, 16: 139-144, 2007
- 10) ペプロウ, H.E., 外間邦江訳: 人間関係の技術 看護学翻訳論文集 1. 現代社, 15, 1967
- 11) トラベルビー, J., 長谷川浩, 藤枝知子訳: 人間対人間の看護. 医学書院, 19, 1974
- 12) 三浦まゆみ: 看護教育での KiSS-18 の活用. 川島書店, 71-83, 2007
- 13) 千葉京子・相川充: 看護における社会的スキル尺度の構成. 看護研究, 33 (2): 53-62, 2000
- 14) 菊池彰夫・堀毛一也編著: 社会的スキルの心理学. 川島書店, 179, 2002
- 15) 菊池彰夫 編著: 社会的スキルを測る KiSS-18 ハンドブック. 川島書店, KiSS-18 の大学生の標準化資料, 2007
- 16) 工藤千賀子他: G 大学看護学部における社会的スキルの実態. 北日本看護学会誌, 45-51, 2007
- 17) 野崎千恵子他: 看護大学生の社会的スキル. 看護教育, 30: 74-76, 1999
- 18) 口藏真由美他: 実習指導者と看護学生の社会的スキルの比較. 中国四国地区国立病院付属看護学紀要, 3: 83-89, 2007

- 19) 藤野ユリ子他：看護系大学4年生の学生生活や対人関係に関する認識と社会的スキル, 産業医科大学雑誌, 27 (3) : 263-272, 2005
- 20) 上掲 12)
- 21) 海口浩芳：カリキュラムにおける一般教育の位置づけとその役割, 北陸学院短期大学紀要, 38 : 71-82, 2006
- 22) 岸田泰子：共通科目「現実をみるG」の授業評価に関する考察, 甲南女子大学研究紀要創刊号 看護学・リハビリテーション編, 47-52, 2008
- 23) 上掲 4)
- 24) 前掲 15)
- 25) 松島るみ：シャイネスが自己開示に及ぼす影響—社会的スキルを媒介として, 日本教育心理学会 41 回総会発表論文集, 357, 1999
- 26) 佐藤静香他：大学初期の適応に及ぼす社会的スキルの影響, 東北心理学会 58 回大会発表, 東北心理学研究, 54, 2004
- 27) 上掲 13)

The Social Skills of Nursing Students (of Private College A) and Their Structure

Sachiyo Ushinohama¹⁾, Takako Ozono¹⁾, Naomi Hirata²⁾

1) Kagoshima Immaculate Heart University

2) Kagoshima University Graduate School of Health Sciences Faculty of Medicine

Key words : Nursing students, Social skills, KiSS-18

Abstract

In recent years, a decrease in social skills among college students has been pointed out. This study was conducted involving new nursing college students with limited social experience to assess such skills. The subjects were fifty first-year students in the nursing department of a private women's college. We examined their social skills using KiSS-18, developed by Akio Kikuchi.

The results were as follows :

1. Their total social skill score was lower compared to that of other nursing students.
2. The students achieved high scores for the items related to advanced social skills, and their scores were relatively low in the fields that required basic skills.
3. The students achieved the highest score for the item "apology", which is consistent with the results of the studies conducted by two other colleges.
4. Factors: "basic relationship skills", "skills to cope with negative feelings and opinions", "skills associated with flexibility", and "superficial social skills" were extracted.

These results are considered to provide basic information to evaluate the effects of curriculums, designed to improve social skills, and useful data to develop them. It is necessary to conduct further studies to examine mid- and long-term changes in their social skills.
